

# 医学部におけるユーザ管理の実態

安徳 恭彰<sup>1)</sup>, 下村 剛<sup>1)</sup>, 佐藤 教人<sup>1)</sup>, 多田 洋<sup>1)</sup>, 首藤 美由紀<sup>1)</sup>,

吉崎 弘一<sup>2)</sup>, 一瀬 光<sup>2)</sup>

1) 大分大学 学術情報拠点医学情報センター

2) 大分大学 学術情報拠点情報基盤センター

antokuy@oita-u.ac.jp

## Operation of a user management system in the Faculty of Medicine

Yasuaki Antoku<sup>1)</sup>, Tsuyoshi Shimomura<sup>1)</sup>, Norito Sato<sup>1)</sup>, Hiroshi Tada<sup>1)</sup>, Miyuki Shuto<sup>1)</sup>,

Koichi Yoshizaki<sup>2)</sup>, Hikaru Ichise<sup>2)</sup>

1) Oita University Medical Information Center

2) Oita University Information Technology Center

### 概要

大学の情報基盤運用においてユーザ管理の重要性は年々ましている。しかし、大学内において各学部間での管理状況は多岐に渡り、一本化しにくいのも周知の事実である。特に医学部においてはその特殊性からユーザ管理の複雑さは簡単には表せない。本発表では、医学部の見地からユーザ管理のあり方の一例を提示する。

## 1 はじめに

大学の情報基盤運用においてユーザ管理の徹底は最重要課題である。入職時の新規作成から、退職時のアカウント削除処理まで責任範囲は大きい。医学部においては特殊な構造をしており、退職後も大学との関係性が続く[1]。

従来、大学病院を出た医師は出身大学で研修医時代を過ごし、研修医終了後、医学部附属病院から他病院への医師の派遣を行うことが慣例となっている。この体系が組織的に働き、俗にいう医局システムを構成する。(図1)。

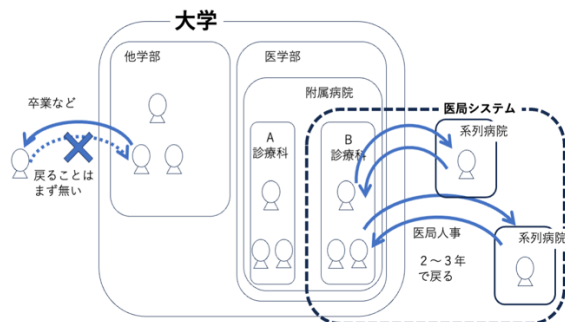


図1 他学部と医局システムの違い

このため附属病院は医師の出入りが多く、大

学を出た医師が、2～3年(早ければ半年程度)程度で大学に出戻りするケースが多々存在する。このため、退職後も大学と関係を持ちつつ活動するケースが他学部に比べて多く、連絡を密に行うための通信手段として大学メールアドレスの継続を希望するケースが多い。

## 2 目的

本学では、これらの対応業務を軽減すべくアカウントの継続管理運用をシステム化し、運用してきた。今後、アカウント管理の見直しを図っており、この機に本システムの運用結果をまとめ報告する。

## 3 方法

医学部において学外転出者は大学職員としては退職になるが、医局に所属したまま医局の指示で他病院で勤務する。このため、本人は大学に所属したつものまま、他病院で働くことになる。数年すれば大学に出戻りする形になり、この間、医局との連絡を取り合うこととなる。

本学では、このような転出者を退職者という身

分でアカウントの利用継続を行なっている。

退職者には、定期的（半年おき）に確認メールを送付し、確認メールへの応答で継続利用を意思表示した者は半年間の利用継続を行なっている。

本システムの管理画面を図2に示す。現ユーザの一覧と人事情報と照合した結果、および右端に現在のステータスが表示される。

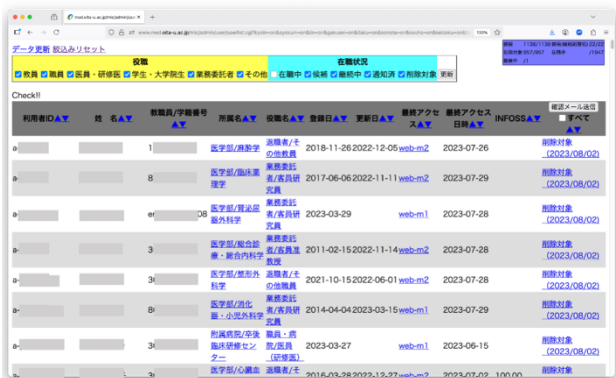


図2 管理画面

ステータスの関係性を図3に示す。ステータスは下記の5つの状態がある。

- 1) 在職者
- 2) 退職者（未通知）
- 3) 退職者（通知済み）
- 4) 継続利用申請者
- 5) 削除対象者

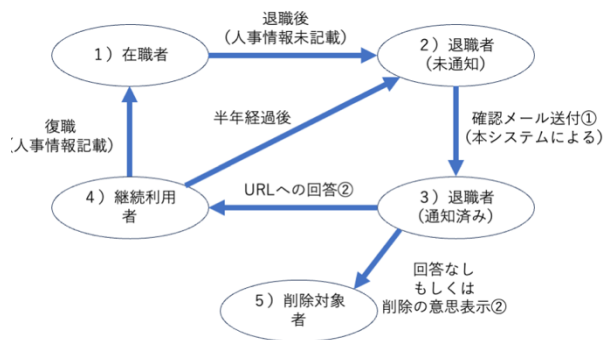


図3 ステータスの関係性

本システムの退職処理では、2) 退職者 に確認メールを送付する（図3①）。①の作業画面を図4に示す。左側に対象者一覧、右側に送付する確認メールの文面が表示される。対象者は一覧で表示され、例外処理（名誉教授など）を行うアカウントに関しては手動で削除する。メール文面は修正可能で、例外的に異なる文面を送る際はここで修正する。最後に送信ボタンを押すと対象者に一斉送信される。

対象者は、確認メールに利用継続をうながす



図4 作業画面

“継続利用回答 URL”（以下、URL）を貼り付け、確認メール文面中のURLをクリックすることで継続確認を行う（図3②）。

継続確認が行われたアカウントはステータスを4）として、半年後に再び削除候補のリストに入る。継続確認が行われないままのアカウントは5）の削除対象者となり本削除を行う。

## 4 結果

本システムは、稼働から5年ほど経過している。それまで退職者の処理は手動で行っており、業務負担も大きいものであった。

また、継続利用中か否かの判断が難しく、放置されていたアカウントも少なくなかった。本システムの導入により当時1270人分あった医学部の退職者アカウントを、255人分まで削減することができた。20%程度まで削減できたことになる。また、その後継続的に運用した結果、年間でおおよそ半数程度のユーザが継続利用を希望している。当初、10%程度まで減らせないと期待していたが、予想以上に利用希望者が多いことが判明した。

## 5 考察

今後、アカウントの管理は重要になってくる。多要素認証を必須とするなど、セキュリティ対策も複雑になり、継続管理も難しくなってくる。ユーザの要望を可能な限り受け入れ、かつ安全に運用することは重要である。

## 参考文献

[1] 安德恭彰, 下村剛, 佐藤教人他, 医学部における情報リソース管理, 大学ICT推進協議会年次大会論文集, 197-198, 2023.